

# 日本語の漢音・呉音と台湾語の読書音・俗音

中澤 信幸

(文化システム専攻言語科学領域担当)

## はじめに

漢字は本来1字=1語=1音が原則であるが、日本漢字音には複数の層が存在する。すなわち漢音・呉音および唐音<sup>とういん</sup>である。これは中国から複数の時期にわたって伝えられた漢字音が、日本ではそれぞれ異なる場で伝承されたことに由来する。

一方、台湾で話される台湾語音は古代中国語に由来する発音であるが、ここにも複数の層が存在する。すなわち読書音(文言音)と俗音(白話音)である。これはもともと俗音が存在した地域に、中央(北方)から新たな読書音が伝来したことに由来しており、その意味では日本の漢音・呉音とよく似ている。

本稿の筆者は、日本漢字音と台湾語音の近似性を利用した「日台基本漢字」を構想している。それを実現する上でも、日本漢字音の漢音・呉音と台湾語の読書音・俗音の問題は避けて通ることはできない。しかしながら台湾語の読書音・俗音の問題を正面から取り上げた論考は、これまでほとんどなかったと言ってよい。本稿はこの台湾語の読書音・俗音の関係を、日本漢字音の漢音・呉音の関係と対照させることにより、その位置付けを試みるものである。

## 1 漢音・呉音と読書音・俗音

### 1.1 日本漢字音と漢音・呉音

日本漢字音には漢音・呉音および唐音の三つの層があることはよく知られている。それらについて以下に概説する。

#### 1.1.1 呉音・漢音・唐音

呉音はもっとも古い層に属し、漢音将来後には「和音」と呼ばれたものである。六朝期の字音が日本に伝えられたものとする説、複数の時代や地

方の音が母胎音となっているとする説、あるいは朝鮮漢字音が介入しているとする説もある。いずれにしても資料の制約もあり、その母胎音や伝来経路は十分には明らかになっていない。

漢音は中国との正式な国交が結ばれてから遣隋使・遣唐使などによって伝えられた字音で、中国北方長安音を母胎音としている。当初はそれまでの「和音」(呉音)に対して「正音」と呼ばれた。朝廷や大学寮などで用いられ、漢籍の読書音として定着していった。一方古くからの呉音は、仏教において経典の読誦音として存続することになる。

唐音は鎌倉時代以降に禅宗によってもたらされた字音で、「行燈」<sup>アンドン</sup>「椅子」<sup>イス</sup>などの語がある。すでに漢音・呉音が定着した後であり、個別語の字音として定着するにとどまった。

これらの字音はもともと異なる時期に伝来し、また異なる場で使われ続けたもので、体系的な違いというわけではなかった。ただし仏教教学においては、漢音との対比から呉音の整備が行われていたようである。

江戸時代に入ると、中国から伝えられた韻図である『韻鏡』をもとに、漢音・呉音が体系的に整備されるようになる。文雄『磨光韻鏡』(1744年刊、延享元)がその草分けで、これは後に「字音仮名遣い」と呼ばれるようになる。この「字音仮名遣い」によってすべての漢字に漢音・呉音が与えられるようになった。一方、歴史的には存在しなかった字音を人為的に作り出すことにもつながり、これが近代に入って批判されることになる。

#### 1.1.2 呉音・漢音の対応関係

以下に呉音・漢音・唐音の例を示す<sup>(1)</sup>。

<sup>(1)</sup> 沼本克明(1986)序章を参照し加筆。

漢字	呉音	漢音	唐音
行	ギャウ	カウ	アン
経	キャウ	ケイ	キン
瓶	ヒャウ	ヘイ	ヒン
木	モク	ボク	モ
脚	キヤク	カク	キャ
頭	ヅ	トウ	チウ
宮	ク	キウ	キュン
遅	ヂ	チ	シ
和	ワ	クワ	ヲ
暖	ナン	ダン	ノン

このうち呉音と漢音について、そのおおまかな対応関係を示しておこう。

最初に声母であるが、中国語の有声声母は、呉音では濁音、漢音では清音となる。

中国語	呉音	漢音
b	バ行	ハ行
d	ダ行	タ行
g	ガ行	カ行

これは唐代長安音で起こった「有声音の無声音化」の反映である。（下記参照。）

b → p  
d → t  
g → k

また、中国語の鼻音声母は、呉音ではマ行・ナ行、漢音ではバ行・ダ行となる。

中国語	呉音	漢音
m	マ行	バ行
n	ナ行	ダ行

これも唐代長安音で起こった「鼻音の非鼻音化」の反映である。（下記参照。）

m → mb  
n → nd

この他、「日母」に属する字は、呉音ではナ行、漢音ではザ行となる。例えば以下のようなものである。

漢字	呉音	漢音
日	ニチ	ジツ
二	ニ	ジ

次に介音であるが、中国語の介音-iは、漢音では概ね「拗音」として反映されるのに対して、呉音では反映されない場合がある。例えば以下のよ

うである。

漢字	呉音	漢音
宮	クウ	キウ
燭	ソク	シヨク
魚	ゴ	ギヨ
蔭	オン	イン
郷	ガウ	キヤウ

最後に韻母であるが、こちらにも体系的な対応関係がある。例えば「齊韻開口」に属する字には、呉音と漢音とで以下のような対応がある。

漢字	呉音	漢音
溪	カイ	ケイ
鷄	カイ	ケイ
齊	サイ	セイ
細	サイ	セイ
弟	ダイ	テイ
第	ダイ	テイ
謎	マイ	ベイ
犁	ライ	レイ

ただし上記のような対応が常に当てはまるとは限らない。1.1.1でも述べたように、特に呉音と漢音については人為的に整備された部分もあるので注意が必要である。

## 1.2 台湾語の読書音・俗音

台湾語にも、読書音（文言音）と俗音（白話音）という複数の層が存在する。この両者について以下に概説する。

### 1.2.1 読書音・俗音

台湾語のもとになった中国閩南方言では、同一の文字に対する発音が読書音（文言音）と俗音（白話音）とで異なるという、「文白両読」の現象が特に厳格である。この「文白両読」が形成された原因であるが、閩南方言は音声の面で北方標準音との差が大きかったので、話し言葉は閩南方言だったのに対して、書き言葉は中国全土共通の文学言語となった。そして読書をする時には北方の「官話」の発音を模倣したので、閩南音を基礎としながらも、一方では「官話」の影響を受けて改造された読書音が形成されたものと考えられている。

このように漢字音が複数の階層となって存続し

ているという点では、日本の漢音・呉音とよく似ているといえる。

光復（1945年）後の台湾では中国語（北京語）が標準語となったために、台湾語そのものが「俗語」となっている。そのため台湾語の中の読書音と俗音の違いは、それほど意識されないようである。ただし数字については複数の読み方が意識される。それぞれの読み方は以下の通り。

数字	零	一	二	三	四
読書音	khong <sup>3</sup> (曠)	it <sup>4</sup>	ji <sup>7</sup>	sam <sup>1</sup>	su <sup>3</sup>
俗音	leng <sup>5</sup>	chit <sup>8</sup>	nng <sup>7</sup>	sann <sup>1</sup>	si <sup>3</sup>

五	六	七	八	九	十
ngoo <sup>2</sup>	liok <sup>8</sup>	chhit <sup>4</sup>	pat <sup>4</sup>	kiu <sup>2</sup>	sip <sup>8</sup>
goo <sup>7</sup>	lak <sup>8</sup>	chhit <sup>4</sup>	poeh <sup>4</sup>	kau <sup>2</sup>	chap <sup>8</sup>

このうち読書音は、特に電話番号を言う時などに使われる。

### 1.2.2 読書音・俗音の対応関係

ここでは台湾語と関係の深い、中国閩南方言の一つである厦門語の読書音・俗音の対応関係を示す<sup>(2)</sup>。

#### (1) 韻母の対応

##### ①単母音・二重母音の対応

字音	話音	例字
a	e	啞把仮
e	ue	鷄齊細
i	ia	寄騎奇蟻
i	e	皮糜未尾
o	e	夥坐貨
o	ua	破歌拖
o	au	到掃老草
ɔ	au	愉搜樓口走
ɔ	ue	初疏梳
u	ɔ	無斧雨芋
ai	ua	帶頼盖蔡
ai	ue	稗解蟹鞋
ai	e	戴災袋
au	a	飽拋膠孝
iu	au	流劉九
iu	u	舅旧久有
iau	io	表漂苗叫尿

ui	e	飛脆推退
ue	e	倍佩稅歲
ua	ue	花瓜話画

##### ②鼻尾韻・鼻化韻の対応

字音	話音	例字
am	ā	担胆敢三衫
iam	ī	鉗染閃添甜
an	uā	单炭寒山岸
an	in	揀眼閑
ian	ī	辺天見篇
ian	in	肩前
ian	an	田牽瓣
ian	iā	燃件健
ian	in	面浅眠
uan	uā	盤官半寬歡伝
uan	ŋ	穿転全串算断
un	ŋ	門問頓損村孫
ian	iā	呈成聖餅命京定
in	ī	彭撐青姓晶醒
in	an	肯等曾層
in	in	輕屏藤
ɔŋ	aŋ	東通公桶馮旁芒房港
ɔŋ	ŋ	湯康光霜床装
ioŋ	iū	張梁章姜唱
ioŋ	in	竜種用胸拱
ioŋ	iaŋ	亮響唱
ioŋ	ŋ	長丈兩
ioŋ	aŋ	虫瓮

##### ③閉鎖音尾韻の対応

字音	話音	例字
ap	aʔ	踏搭合匣鴨挿
iap	ueʔ	狹莢笠
iap	aʔ	貼臘獵協
at	uaʔ	割渴葛撒辣
iat	iʔ	裂薛舌折鉄
iat	at	結節揭別
iat	uat	閱熱撇
uat	uaʔ	鉢撥潑活末刷刮
uat	eʔ	雪絶月缺
ɔk	ak	木読瀑目剝角
ɔk	oʔ	落作錯索薄
io̯k	ik	竹菊叔緑局曲
io̯k	ioʔ	略約着
ik	eʔ	白客帛格麦册脈
ik	iaʔ	壁只亦易錫
ik	at	瑟虱栗力值

<sup>(2)</sup> 詹伯慧（1983）pp.248-253 をもとに一部改変。

(2) 声母の対応

① 調音点が同じものの対応

字音	話音	例字
t'	t	甜恬

② 調音点に近いものの対応

字音	話音	例字
s	t	事
s	t'	飾
ts	t	滓注転
ts	t'	柱
ts'	t'	釵窓
h	k'	呼
k	h	袞
g	h	蟻岸
t	ts	知陣
ts	d	遮跡字

③ 調音点が高いものの対応

字音	話音	例字
h	p	飛斧反婦吠肥
h	p'	沸伏紡

(3) 声調の対応<sup>(3)</sup>

① 読書音が陰平，陽平で，白話音も陰平，陽平。  
例えば，

例字	東	功	光	房	唐	眉
読書音	tɔŋ <sup>1</sup>	kɔŋ <sup>1</sup>	kɔŋ <sup>1</sup>	pɔŋ <sup>5</sup>	tɔŋ <sup>5</sup>	bi <sup>5</sup>
白話音	taŋ <sup>1</sup>	kaŋ <sup>1</sup>	kŋ <sup>1</sup>	paŋ <sup>5</sup>	tŋ <sup>5</sup>	bai <sup>5</sup>

② 読書音が上声で，白話音は大多数が上声，少数が陽去。例えば，

例字	榜	把	紡	有	瓦	想
読書音	pɔŋ <sup>2</sup>	pa <sup>2</sup>	hɔ <sup>2</sup>	iu <sup>2</sup>	ua <sup>2</sup>	siɔŋ <sup>2</sup>
白話音	pŋ <sup>2</sup>	pe <sup>2</sup>	p'aŋ <sup>2</sup>	u <sup>7</sup>	hia <sup>7</sup>	siu <sup>7</sup>

③ 読書音が陰去，陽去で，白話音も陰去，陽去。  
例えば，

例字	破	半	見	被	未	硬
読書音	p'o <sup>3</sup>	puan <sup>3</sup>	kian <sup>3</sup>	p'i <sup>7</sup>	bi <sup>7</sup>	gin <sup>7</sup>
白話音	p'ua <sup>3</sup>	puā <sup>3</sup>	ki <sup>3</sup>	p'e <sup>7</sup>	be <sup>7</sup>	gi <sup>7</sup>

<sup>(3)</sup> 閩南方言の声調は一声～八声までの7声体系（六声を欠く）である。声調はまた次のようにも表される。

一声	二声	三声	四声	五声	七声	八声
陰平	陰上	陰去	陰入	陽平	陽去	陽入
上平	上声	上去	上入	下平	下去	下入

④ 読書音が陰入で，白話音は大多数が陰入，少数が陽入。例えば，

例字	搭	結	節	貼	瞞	咯
読書音	tap <sup>4</sup>	kiat <sup>4</sup>	tsiat <sup>4</sup>	t'iap <sup>4</sup>	k'ap <sup>4</sup>	k'ik <sup>4</sup>
白話音	taʔ <sup>4</sup>	kat <sup>4</sup>	tsueʔ <sup>4</sup>	t'aʔ <sup>4</sup>	k'ap <sup>8</sup>	k'ak <sup>8</sup>

⑤ 読書音が陽入で，白話音は大多数が陽入，少数が陰入。例えば，

例字	別	密	学	十	落	沐
読書音	piat <sup>8</sup>	bit <sup>8</sup>	hak <sup>8</sup>	sip <sup>8</sup>	lok <sup>8</sup>	bok <sup>8</sup>
白話音	pat <sup>8</sup>	bat <sup>8</sup>	oʔ <sup>8</sup>	tsap <sup>8</sup>	lak <sup>4</sup>	bak <sup>4</sup>

(4) 声，韻，調の三つの面がみな異なるもの

例字	読書音	白話音
痒	ioŋ <sup>2</sup>	tsiu <sup>7</sup>
瓦	ua <sup>2</sup>	hia <sup>7</sup>

このように，読書音・俗音にも日本語の漢音・呉音と同様に体系的な対応関係があることがわかる。

## 2 『日台大辞典』 付載「日台字音便覧」

### 2.1 「日台字音便覧」について

台湾は1895年（明治28）から1945年（昭和20）までの50年間，日本により統治されていた。その間統治上の必要から台湾語（閩南語）の研究が行われた。また台湾総督府を中心に，いくつかの日本語と台湾語との対訳辞書が編纂された。『日台大辞典』（1907年刊，明治40）もその一つである<sup>(4)</sup>。

「日台字音便覧」（以下，「字音便覧」と略称）は『日台大辞典』に付載される漢字音対照表である。漢字が部首の画数順に排列され，それに日本漢字音（漢音・呉音），韻（平水韻），台湾語音が記される。台湾語音は読書音・俗音が，それぞれ厦門音と漳州音とに分けて（または厦門・漳州共通音として）片仮名で示される。掲出漢字は全部で7,283字におよぶが，352字については「同～」「俗～字」のような異体字注記となっており，音注は付されない。したがって音注が付される字は

<sup>(4)</sup> 中澤（2010）参照。

6,931 字となる。

本稿の筆者はこの先人の資産とも言うべき「日台字音便覧」をデータベース化することにより、明治時代における「字音仮名遣い」の実態、また日本統治時代における台湾語音の実態を簡単に見られるようにした。そしてこのデータベースをもとに、江戸時代以来の「字音仮名遣い」に基づく日本漢字音を現代の実態に合うように置き換え、台湾語音も片仮名からローマ字に置き換えることで、現代版「日台字音便覧」データベースを整備しようとしている。さらにそこから字数を絞り、一覧表とすることで、「日台基本漢字」発音対照表を構築しようとしているところである<sup>(5)</sup>。

## 2.2 「字音便覧」における漢音・呉音

『日台大辞典』の「凡例」には、漢音・呉音について次のような記述がある。

漢吳音ノ假名遣ハ、主トシテ太田方氏ノ漢吳音圖ニ據リタレドモ、多少ノ變更ヲナセル處アリ (p.6)

これによれば、『日台大辞典』の漢字音はおもに太田全斎『漢吳音図』（1815 年成、文化 12）に拠っているという。つまり江戸時代以来の「字音仮名遣い」を受け継いでいるということがわかる。ただし「多少ノ變更」をしているという点に留意する必要がある。

また「字音便覧」の冒頭には

漢字ノ下ニ附シタル假名ハ普通、右方ハ漢音、左方ハ吳音ヲ表ハセドモ俗音ヲ混ヘ出セル所アリ

という説明がある。ここでも「俗音」を交えているという点に留意する必要がある。ただし「字音便覧」の中では、実際にどれが「俗音」なのか明確に示されることはない。

実際に「字音便覧」の漢音・呉音を見てみると、『漢吳音図』や文雄『磨光韻鏡』（1744 年刊、延享元）の字音と一致するものもあれば、それとは異

なる字音も見られる。一致しないものについては、「字音便覧」冒頭で述べられたような「俗音」として記されている可能性がある。

この「俗音」であるが、『漢吳音図』では「字音仮名遣い」の漢音・呉音には合わないものの、日常的に使われていてもはや改められない字音としている。「字音便覧」もこれを承けているものと考えられる。台湾語の俗音とは異なることに注意したい。

## 2.3 「字音便覧」における読書音・俗音

「字音便覧」の冒頭には

韻字ノ下ニ附シタル假名ハ右方ハ廈門音、左方ハ漳州音ニシテ第一段ハ讀書音、第二段以下ハ俗音ヲ表ハス、而シテ、其一行ナルモノ、或ハ二行ニシテ括弧ヲ施セルモノハ廈門、漳州共通ノ音ナルコトヲ示ス

という説明がある。つまり台湾語を「廈門音」と「漳州音」とに分け、それぞれについて読書音と俗音を示すとしているのである<sup>(6)</sup>。

実際に「字音便覧」の台湾語音を見ると、音注の付される 6,931 字のすべてに読書音が付されるのに対し、俗音が付されるのは 1,603 字にとどまる。つまり全体の 23%のみということになるが、当時の日常語としてはそれで十分だったのかも知れない<sup>(7)</sup>。

## 3 「字音便覧」から見た両者の関係

本稿の冒頭でも述べたように、「日台基本漢字」発音対照表を完成させるためには、日本漢字音の漢音・呉音と台湾語の読書音・俗音との関係の検

<sup>(6)</sup> 台湾語は福建省の泉州音と漳州音がもともになっているが、「字音便覧」では泉州音は載せられていない。これについて洪惟仁（1993）では次のように述べられる。

後附〈日臺字音便覧〉羅列漢字的日語吳音・漢音・俗音及閩南語廈門・漳州的文白異讀，是閩南語漢字音讀的重要史料。只可惜未能列出泉州音，否則價值當更高。

<sup>(7)</sup> 日本の「当用漢字表」の 1,850 字、「改定常用漢字表」の 2,136 字を考え合わせると、日常必要な漢字としてはこのぐらいが適当なのかも知れない。ちなみに「臺灣閩南語推薦用字」（4.1 参照）は 700 字である。

<sup>(5)</sup> 中澤（2011）。

証は不可欠である。そこで以下では、「日台字音便覧」の中で読書音・俗音の対立のある 1,603 字の中から、おもに 1.1.2 で漢音・呉音の対応関係の事例として説明したものを中心に、漢音・呉音と読書音・俗音との関係を見つめていくことにしたい。

### 3.1 声母の違い

#### 3.1.1 漢音清音・呉音濁音

まず漢音清音、呉音濁音の事例（「有声音の無声音化」が反映したもの）から見ていこう。表 1 に漢音ハ行、呉音バ行となる字の、読書音・俗音との対応例を示す<sup>(8)</sup>。

表 1 漢音ハ行・呉音バ行

漢字	漢音	呉音	読書音	俗音
平	ハイ	ビャウ	ping <sup>5</sup>	piann <sup>5</sup> pinn <sup>5</sup> 厦 penn <sup>5</sup> 漳
浮	フ	ブ	hu <sup>5</sup>	phu <sup>5</sup>
父	フ	ボ	hu <sup>7</sup>	pe <sup>7</sup>
琵琶	ヒ	ビ	pi <sup>5</sup>	gi <sup>5</sup>
病	ハイ	ビャウ	ping <sup>7</sup>	pinn <sup>7</sup> 厦 penn <sup>7</sup> 漳

これを見ると、日本漢字音のハ行・バ行は台湾語音では「p-」「ph-」<sup>(9)</sup>「h-」と対応していることがわかる。（ただし「琵琶」の俗音は「g-」。）しかし読書音と俗音とで清濁の対立を示しているのは皆無である。

表 2 に漢音タ行、呉音ダ行となる字の、読書音・俗音との対応例を示す。

表 2 漢音タ行・呉音ダ行

漢字	漢音	呉音	読書音	俗音
代	タイ	ダイ	tai <sup>7</sup>	tue <sup>7</sup> te <sup>7</sup>
傳	テン	デン	thuan <sup>5</sup> 厦 thuan <sup>5</sup> 漳	tshuan <sup>5</sup> 漳
打	タ	ダ	tann <sup>2</sup>	phah <sup>4</sup>
蝶	テフ	デフ	tiap <sup>8</sup>	iah <sup>8</sup>
電	テン	デン	tian <sup>7</sup>	nann <sup>3</sup>

<sup>(8)</sup> 台湾語については「日台字音便覧」では片仮名で記されているが、本稿では「臺灣閩南語羅馬字拼音方案」（台湾教育部、2006 年）に基づくローマ字表記に変換して示す。ただし印刷の都合上、声調は数字で示す。また「厦」は「廈門音」, 「漳」は「漳州音」を表す。以下同じ。

<sup>(9)</sup> 「-h-」は有気音を表す。

日本漢字音のタ行・ダ行は台湾語音では「t-」「th-」「tsh-」と対応していることがわかる。（「打」の俗音は「ph-」, 「蝶」の俗音は声母なし。）しかし漢音ハ行、呉音バ行の場合と同様、読書音と俗音とで清濁の対立を示しているのは皆無である。

表 3 に漢音カ行、呉音ガ行となる字の、読書音・俗音との対応例を示す。

表 3 漢音カ行・呉音ガ行

漢字	漢音	呉音	読書音	俗音
下	カ	ゲ	ha <sup>7</sup> 厦 he <sup>7</sup> 漳	he <sup>7</sup> e <sup>7</sup> ke <sup>7</sup>
共	キョウ	グウ	kiong <sup>7</sup>	kang <sup>7</sup>
具	ク	グ	ku <sup>7</sup> 厦 ki <sup>7</sup> 漳	khu <sup>7</sup> 厦 khi <sup>7</sup> 漳
紅	コウ	グ	hong <sup>5</sup>	ang <sup>5</sup>
賢	ケン	ゲン	hian <sup>5</sup>	gau <sup>5</sup>

日本漢字音のカ行・ガ行は台湾語音では「k-」「kh-」「h-」と対応していることがわかる。（「賢」の俗音は「g-」, 「下」の俗音の一つ, 「紅」の俗音は声母なし。）やはり、読書音と俗音とで清濁の対立（無声・有聲の対立）を示しているのは皆無である。

以上、漢音清音、呉音濁音の事例では、漢音・呉音と読書音・俗音との関係はパラレルではないことがわかる。

台湾語には「b-」「j-」「g-」「ng-」といった濁声母（有声声母）が存在する。しかし特に「b-」「j-」については、唐代の「鼻音の非鼻音化」が反映したものであり、「p / b」「t / d」といった清濁の対立が存在するわけではないのである。

#### 3.1.2 漢音非鼻音・呉音鼻音

次に、漢音バ行・ダ行、呉音マ行・ナ行の事例（「鼻音の非鼻音化」が反映したもの）を見ていこう。表 4 に漢音バ行・呉音マ行となる字の、読書音・俗音との対応例を示す。

表4 漢音バ行・呉音マ行

漢字	漢音	呉音	読書音	俗音
冒	バウ	モウ	moo <sup>7</sup>	boo <sup>7</sup>
間	ブン	モン	bun <sup>7</sup>	mng <sup>7</sup> 厦 mui <sup>7</sup> 漳
埋	バイ	マイ	bai <sup>5</sup>	tai <sup>5</sup>
未	ビ	ミ	bi <sup>7</sup>	be <sup>7</sup> 厦 bue <sup>7</sup> 漳
罵	バ	メ	ma <sup>7</sup>	me <sup>7</sup>

読書音, 俗音ともに「m-」で対応する場合と「b-」で対応する場合とあることがわかる。(「埋」の俗音は「t-」。) 日本漢字音の漢音バ行・呉音マ行と呼応しているようにも見えるが, 台湾語には読書音「m-」・俗音「b-」となる場合と, 逆に読書音「b-」・俗音「m-」となる場合とがあることに注意する必要がある。

表5に漢音ダ行・呉音ナ行となる字の, 読書音・俗音との対応例を示す。

表5 漢音ダ行・呉音ナ行

漢字	漢音	呉音	読書音	俗音
内	ダイ	ナイ	lue <sup>7</sup>	lai <sup>7</sup> 厦 lui <sup>7</sup> 厦 lai <sup>7</sup> 漳
奈	ダイ	ナイ	nai <sup>7</sup>	ta <sup>7</sup>
孃	ダイ	ネ	nai <sup>2</sup>	ne <sup>2</sup>
尼	ヂ	ニ	ni <sup>5</sup>	li <sup>5</sup>
尿	デウ	ネウ	jiau <sup>7</sup>	jio <sup>7</sup>

読書音, 俗音ともに「l-」で対応する場合, 「n-」で対応する場合, 「j-」で対応する場合, 「尼」のように読書音「n-」・俗音「l-」で対応する場合, そして「奈」のように読書音「n-」・俗音「t-」で対応する場合とあることがわかる。「奈」の場合, 日本漢字音の漢音ダ行・呉音ナ行と呼応しているようにも見えるが, この例は決して多くない。(他には「奈 読書音 nai<sup>7</sup> 俗音 ta<sup>7</sup>」「那 読書音 na<sup>2</sup> 俗音 to<sup>2</sup> ta<sup>2</sup>」のみ。) それよりも日本語の発音にはない「l-」で対応する場合が多いことに注意する必要がある。

表6に漢音ザ行・呉音ナ行となる字の, 読書音・俗音との対応例を示す。

表6 漢音ザ行・呉音ナ行

漢字	漢音	呉音	読書音	俗音
耳	ジ	ニ	jinn <sup>2</sup> ni <sup>2</sup>	hi <sup>7</sup> hinn <sup>7</sup>
肉	ジョク	ニク	jiok <sup>8</sup>	hik <sup>8</sup> bah <sup>4</sup>
若	ジャク	ニヤク	jiok <sup>8</sup> 厦 jiak <sup>8</sup> 漳	na <sup>2</sup> jua <sup>7</sup>
貳	ジ	ニ	ji <sup>7</sup>	nng <sup>7</sup>
輓	ゼン	ナン	luan <sup>2</sup>	nng <sup>2</sup> 厦 nui <sup>2</sup> 漳

これら「日母」に属する字は, 台湾語音では「j-」「n-」「l-」「h-」「b-」といった, さまざまな音で対応する。そのうち「若」「貳」の場合, 日本漢字音の漢音ザ行・呉音ナ行と呼応しているようにも見える。ただ「若」の場合俗音の中でも「n-」と「j-」とがあり, また「耳」の場合読書音の中に「j-」と「ni-」とがあることに注意する必要がある。

以上, 漢音非鼻音, 呉音鼻音の事例では, 漢音・呉音と読書音・俗音との関係は完全にパラレルとは言えないものの, ある程度呼応した関係になっていることがわかる。

### 3.2 介音・韻母の違い

まず介音であるが, 1.1.2で例に出した字に「日台字音便覧」の内容を当てはめると, 表7のようになる。

表7 介音

漢字	漢音	呉音	読書音	俗音
宮	キュウ	ク	kiung <sup>1</sup> 厦 kiung <sup>1</sup> 漳	king <sup>1</sup> 厦
燭	シヨク	シユク	tsiok <sup>4</sup>	tsik <sup>4</sup>
魚	ギヨ	ゴ	gu <sup>5</sup> 厦 gi <sup>5</sup> 漳	hi <sup>5</sup>
蔭	イン	オン	im <sup>3</sup>	ng <sup>3</sup>
郷	キャウ	ガウ	hiong <sup>1</sup> 厦 hiang <sup>1</sup> 漳	hiunn <sup>1</sup>

いずれも読書音と俗音で韻母が異なり, 介音の有無の違いがあるように見える。ただこれが, 日本漢字音の拗音と直音との関係に完全に呼応するとはまでは言い切れない。ちなみに「日台字音便覧」では「燭」の呉音を(「ソク」ではなく)「シユク」としているが, これは現実の字音を踏まえていな

い「字音仮名遣い」によるものと考えられる。いずれにしろ、介音に関しては日本漢字音の側でも表記にユレが出てくるところである。

次に韻母であるが、やはり 1.1.2 で例に出した「齊韻開口」字に「日台字音便覧」の内容を当てはめると、表 8 のようになる。

表 8 齊韻開口

漢字	漢音	呉音	読書音	俗音
弟	テイ	ダイ	te <sup>7</sup>	ti <sup>7</sup>
溪	ケイ	カイ	khe <sup>1</sup> 厦 khe <sup>1</sup> 漳	khue <sup>1</sup> 厦
犁	レイ	ライ	le <sup>5</sup> 厦 le <sup>5</sup> 漳	lue <sup>5</sup> 厦
第	テイ	ダイ	te <sup>7</sup> 厦 te <sup>7</sup> 漳	tue <sup>7</sup> 厦
細	セイ	サイ	se <sup>3</sup> 厦 se <sup>3</sup> 厦	sue <sup>3</sup> 厦
謎	ベイ	マイ	be <sup>7</sup>	bi <sup>7</sup>
鶏	ケイ	カイ	ke <sup>1</sup> 厦 ke <sup>1</sup> 漳	kue <sup>1</sup> 厦
齊	セイ	サイ	tse <sup>5</sup> 厦 tse <sup>5</sup> 漳	tsue <sup>5</sup> 厦 tsiau <sup>5</sup> 厦 tsiau <sup>5</sup> 漳

いずれも読書音と俗音で韻母が異なっていることがわかる。ただそれが「弟」「謎」のように「-e」と「-i」の違いであったり、「第」「細」のように「-e」と「-ue」の違いであったりするなど、日本漢字音の「-ei / -ai」のような単純な対応ではないことに注意しなければならない。やはり漢音・呉音と完全に呼応するとまでは言い切れない。

### 3.3 両者はパラレルな関係か

日本の漢音・呉音と台湾語の読書音・俗音は、ともに「漢字 1 字に複数の音が存在する」という意味では非常によく似ている。また個別の字を見ると、互いに呼応していると感じさせる部分もある。ただし全体的に見た場合には、この両者は完全にパラレルな関係とは言いがたい。やはり両者の性格の違いを確認しつつ、取り扱っていく必要がある。

## 4 現代台湾語と読書音・俗音

台湾語の読書音・俗音について、日本漢字音の

漢音・呉音との関係から検証してきた。それではこの読書音・俗音は、現在の台湾ではどのように使われているのだろうか。ここでは「臺灣閩南語推薦用字 700 字表」を利用して、現代台湾語における読書音・俗音の一端を見ていくことにしたい。

### 4.1 臺灣閩南語推薦用字 700 字表

「臺灣閩南語推薦用字 700 字表」(以下、「推薦用字」)は、台湾(中華民国)教育部より 2009 年 10 月に公布された漢字表である。(2010 年 9 月に修正されている。)[編號](番号)[建議用字](掲出字)に続いて、「音讀」「又音」「對應華語」(対応する中国語)[用例][異用字]が示される。「音讀」に加えて「又音」を示すことで、「1 字複数音」に対応しているのである。字数はその名の通り 700 字である<sup>(10)</sup>。

### 4.2 読書音・俗音の現れ方について

それでは台湾語の読書音・俗音が「推薦用字」でどのように現れているか、見てみることにしよう。

この表で「又音」が示されるのは全 700 字中 179 字である。全体の約 26%にとどまっており、決して多くはない。その中のいくつかを「字音便覧」の読書音・俗音と対照させると、表 9 のようになる。

表 9 推薦用字と読書音・俗音

漢字	推薦用字		字音便覧	
	音讀	又音	読書音	俗音
見	kian <sup>3</sup>	kinn <sup>3</sup>	kian <sup>3</sup>	kinn <sup>3</sup>
母	bu <sup>2</sup>	bo <sup>2</sup>	boo <sup>2</sup>	bu <sup>2</sup> 厦 bo <sup>2</sup> 漳
熱	juah <sup>8</sup>	luah <sup>8</sup>	jiat <sup>8</sup>	juah <sup>8</sup>
日	jit <sup>8</sup>	lit <sup>8</sup> , git <sup>8</sup>	jit <sup>8</sup>	なし

最初の「見」の例では、「推薦用字」の「音讀」「又音」が「字音便覧」の読書音・俗音と完全に呼応している。読書音・俗音の両方が「1 字複数音」

<sup>(10)</sup> 台湾教育部の web サイトにて閲覧可能である。

[http://www.edu.tw/files/download/MANDR/700iongji\\_990915.pdf](http://www.edu.tw/files/download/MANDR/700iongji_990915.pdf)

として存続していることが見て取れる。

ところが次の「母」になると、「音讀」と「又音」との関係は読書音と俗音との関係ではなく、俗音の中の厦門音と漳州音との関係と呼応する。また「熱」は「推薦用字」の「音讀」と俗音のみが同じである。この字の場合、「又音」は俗音の中で変化したものようである。さらに「日」は「推薦用字」では3種類の音を持つが、「字音便覧」では読書音のみとなっている。この字の場合は「熱」とは逆に、読書音の中で変化したものようである。

このように、現代台湾語における「1字複数音」は、読書音・俗音の両方が現れている場合もあれば、そうではない場合もあることがわかる。

### おわりに

以上、日本漢字音の漢音・呉音と台湾語の読書音・俗音との関係の検証を行ってきたが、そこでわかったことは、この両者は部分的には呼応するものの、完全にパラレルな関係ではないということであった。

漢字は1字=1音が原則であり、日本漢字音のような「1字複数音」は特殊なものとされてきた。しかし本稿での検証を通して、「1字複数音」は日本漢字音だけのものではないこと、またその内実もさまざまであることが明らかになった。

この検証結果を「日台基本漢字」発音対照表の構築の上でどのように役立てるかが、今後の課題である。しかしながら今はそのことを論じる余裕がない。他日に期することにして筆を擱くことにしたい。

※本稿は平成24年度科学研究費助成事業（基盤研究(C)「現代版「日台字音便覧」データベースの整備と「日台基本漢字」発音対照表の構築」研究代表者：中澤信幸）による研究成果の一部である。

### 引用文献

洪惟仁（1993）日據時代的辭書編纂（『閩南語經典辭書彙編7 臺日大辭典〈上巻〉』所収，武陵出版有限公司）

版有限公司）

詹伯慧（1983）『現代漢語方言』（樋口靖訳，光生館）

中澤信幸（2010）「『日台大辞典』付載「日台字音便覧」について」（『山形大学大学院社会文化システム研究科紀要』7）

中澤信幸（2011）「『日台大辞典』と東アジア共通漢字」（『山形大学大学院社会文化システム研究科紀要』8）

沼本克明（1986）『日本漢字音の歴史』（東京堂出版）

## 日語之漢音、吳音與台灣語之文讀音、白讀音

中澤 信幸

（文化系統專攻言語科學領域擔當）

漢字本有一字一音之原則，但在日本漢字音中兼有漢音、吳音多種發音。此因從中國不同時代傳來之發音，在日本得以不同方式傳承至今。台灣所用台灣語中亦有文讀音（文言音）與白讀音（白話音）之別。此乃原本存在白讀音之區域，接受中央（北方）所傳新式文讀音所致，由此可知與日語之漢音、吳音異讀現象頗為類似。為製作「日臺基本漢字」發音對照表，對於日本漢字音中漢吳音之異、台灣語中文白讀之異問題無可迴避。本稿就同字異讀現象進行了對照研究，考證了異讀多音間之聯繫。而後筆者瞭解到其間固然互有對應，但相異之處亦甚多。日本漢字音中「同字異讀」向來被認為特殊現象，但通過本稿考證可知此非日語所獨有，並可以各種實例得悉其詳。